

補足 memo

■ 「ファンタジー・神話・夢」 p.28

美学用語としての「作品」、「作者」、「テキスト」について

- ・「作品」とは? (= 近代的な「作品概念」とは?, その美学的定義とは?)

「作品」とは、人の作るもののうち、自らの内なる精神的世界を開示しようとする「作者」によって作られた物。

作品 = work (英), oeuvre (仏, ウーヴル), Werk (独, ヴェルク)

近代の「作品概念」は、「作品」を「作者」に属するものとみて、「作品」を「作者」の人生で説明しようとする態度を生んだ。作品解釈に際して、「作者の意図」を持ち出そうとする心の動きのなかに、このような「作品概念」は根づよく残っている。

- ・「作者」とは?

「作者」とは、「作品」に自らの内なる精神的世界を開示しようとする創造主体。

- ・「テキスト」(text)とは?

フランスの批評家 ロラン・バルト (Roland Barthes, 1915-1980) が 1970 年頃に近代的な「作品概念」を批判してそれに対置した概念(「テキスト概念」)。つまり、バルトは制作物が「作者」の精神性をもとにゼロから創造されるもの(「作品」)とする見方を批判して、制作物が「引用」や「コラージュ」によって作り出されるものであるとした。

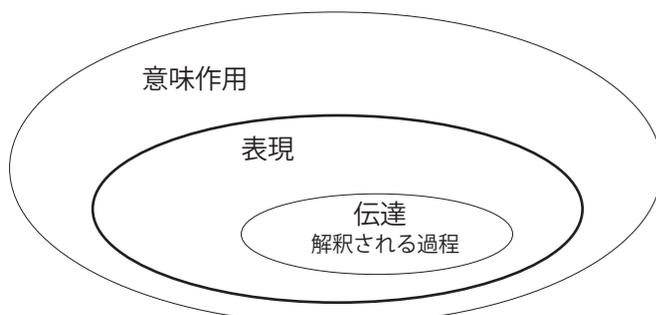
「テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(バルト「作者の死」(1968)花輪光訳、pp.85-86)

したがって、バルトによれば、本来「引用の織物」の産物である「作品」の解釈の正統性の根拠を「作者の意図」におくことを批判し、そうではなくて、彼は「作者の意図」よりも、読者(=批評家)による積極的な解釈の権利を強調した。

このような、バルトにおける「作品概念」に対する批判は、論文の題目でもある「作者の死」の言葉で知られる。

- 【参考文献】 佐々木健一「作品」『美学辞典』東京：東京大学出版会、1995年、148-156頁。
ロラン・バルト『物語の構造分析』東京：みすず書房、1979年、79-105頁。

■ 「意味作用 - 表現 - 伝達」 p.31



「[テキストとは]どうか」

しかし、作品が、、、人間存在にとって根本的なものであることを考えれば、捨て去ることが原理的に不可能なものである、と認識することが必要であろう」(佐々木, 152)